

明張燮輯『七十二家集』陳後主集題辭 翻字及び訳注

久保卓哉
彭臘梅

『七十二家集』の編輯者張燮が著した「題辭」は作家論研究上見のがすことができない文献である。その陳後主集の題辭を翻字し、語注と訳を付け、併せて張燮と『七十二家集』について述べた。

【キーワード】 張燮 七十二家集 題辭 歷代卅四家集 張溥 漢魏六朝百三家集 陳後主集題辭

はじめに

明・張溥の『漢魏六朝百三家集』の題辭は、一九六〇年に殷孟倫が注をほどこしたことによって解釈が容易になり（『漢魏六朝百三家集題辭注』人民文学出版社一九六〇年）、作家論研究の基本文献としてよみがえることになった。だが、それに先行する総集の張燮輯『七十二家集』とその題辭は、これまで注目されることはなかった。^{〔一〕}

しかし張燮が題辭で展開する作家論には見るべきものが多く、それを素通りして文学研究を進めることはできない。

本稿では、行草体がまじる題辭を翻字して句点をほどこし、訳注をつけることによって、研究の一助となるようにした。その対象として、亡国の天子として名高い陳後主集の題辭一篇をとりあげる。

以下にその題辭を【影印】【翻字】【訓】【訳】【注】の順で示し、最後に【解説】を付す。

【影印】(2)

陳後主彙題辭

陳後主才士也彼欲使粉黛盡
為丹鉛伸誕都成麗藻宮中
府中化作淪糜地界而間出替
酒點綴之非為他亡國之主蹟
貨淫刑使民不堪命也即以隋

陳後主集序

煬帝論煬帝文情自起然屬
舸迷樓禍滔沃出而陳僅高拱
于帝閣單于呼韓威彈絕塞而
陳僅摩娑于筆陣摧輪等耳
碩就中相玄亨可數層余悲煬
帝之戮張麗華以謝吳民而到

頭抑又甚也嗟乎臧穀已乎均之

悼表碩揆書之與誌博終是不

佯懷古者那得不憑而吊之乎

厥後李煜之在江南上稱後主

風流罪過而後主正復相當

李煜降宋宋祖目送之曰好一

箇翰林學士余於陳後主上云

然轉換月在手動搖風滿懷視

日月充天德山河壯帝居又何如

乎故當以陳後主為勝

岐海逸民張燮識于金陵



【翻字】

陳後主集題辭

陳後主才士也。彼欲使粉黛盡爲丹鉛神縊、都成麗藻。宮中府中、化作險糜地界、而間出聲酒點綴之。非爲他、亡國之主、黷貨淫刑、使民不堪命也。

即以隋煬帝論、煬帝文情自超然、鳳軻迷樓、禍沿沃土。

而陳僅高拱于帝閭、單于呼韓威殫絕塞。而陳僅摩娑于筆、陣摧輪等耳。顧就中相去言可數層。余悲煬帝之戮張麗華、以謝吳民、而到頭抑又甚也。

嗟乎。臧穀亡羊、均之悼喪。顧挾書之與能博、終是不侔。懷古者那得不憑而弔之乎。

厥後李煜之在江南亦稱後主。風流罪過、兩後主正復相當。李煜降宋、宋祖目送之曰、好一個翰林學士。余於陳後主亦云、然。

轉換月在手、動搖風滿懷。視、日月光天德、山河壯帝居、又何如乎。故當以陳後主爲勝。

岐海逸民張燮識于金陵

【訓】

陳後主集題辭

陳後主は才子なり。彼は粉黛をして尽く丹鉛の神縊と爲し、都て麗藻を成らしむ。宮中と府中は、化して險糜の地界と作り、而も間に声と酒とを出してこれを点綴す。他を爲すに非ず、亡

国の主は、黷貨し淫刑して、民をして命に堪えざらしむるなり。即ち隋煬帝を以て論ずれば、煬帝は文情自ら超然たるも、鳳軻迷樓をつくり、禍い沃土に沿う。

而して陳は僅帝閭に高く拱き、單于呼韓の威は絶塞に殫くす。而るに陳は僅筆を摩娑し、陣は輪等を摧かるのみ。就中相い去るを顧みれば数層なるべしと言う。余は煬帝の張麗華を戮し、以て吳の民に謝するを悲しむ、而して到頭抑そも又甚しきなり。

嗟乎。臧と穀と羊を亡い、これを均しくして喪うを悼む。挾書と能博とを顧みれば、終に是れ侔しからず。懷古する者那ぞ憑りてこれを弔わざるを得んや。

厥の後李煜これ江南に在りて亦後主と稱す。風流の罪過、兩後主正に復た相當す。李煜宋に降りて、宋祖目もてこれを送りて曰く、好き一個の翰林學士なりと。余は陳後主に於ても亦云う、然りと。

轉換して月手に在り、動かし揺らせば風懷に滿つ、もて、日月光天德に光り、山河帝居に壮たり、を視ぶれば、又何如なるか。故より當に陳後主を以て勝れりと爲すべし。

岐海の逸民張燮金陵に識す

【訳】

陳後主集題辭

陳後主は才子である。彼は宮中の美女たちを校訂する士大夫にして、ことごとく詩文を作らせた。宮廷と府内は筆墨の世界と化

し、しかもそこに音楽と酒をまじえて飾りをそえた。他のことをしたのではない。亡国の主は、財物をむさぼり、刑罰を濫用し、民に命令にたえきれなくさせたのである。

これを隋煬帝で論ずれば、煬帝は文才が超絶していたが、華美な巨船や迷楼をつくり、その災禍は国土に流れ下った。

そして陳は宮門の奥で高く腕組みしているあいだに、北方の隋軍の武威は辺塞の地まで覆いつくした。だが陳後主はただ筆を撫でさすり、自陣は車輪などを破壊されるばかりであった。その中で二帝の違いをふり返って見れば数層の差があると言えらる。私は煬帝が張麗華を殺して江南の民に告げたことを悲しむ。つまりはさらに又もつと酷いのだ。ああ、昔、臧と穀の二人がともに羊を亡くしたが、それとひとしく煬帝と陳後主の二人が国を喪つたことをいたみ悲しむ。だが、詩が多くの人に私蔵され広汎に伝唱されたことについて顧みれば、結局二人は同じではないのだ。懐古する者は旧跡にむかつて昔をいたみしのぼざるをえない。

その後李煜が江南でやはりまた後主と称した。風流に耽つた罪過は両後主とも似たり寄つたりである。李煜が宋に投降したとき、宋の太祖は李煜を見送りながら、良き翰林学士ではある、と言つた。私は陳後主に対しても、そうだ、と言いたい。

李煜が宋の太祖の前でうたった歌「満月のように円い団扇を手に、ひとたび扇げば涼風が胸いっぱい満ちる」と、陳後主が隋煬帝の前でうたった歌「日と月が天徳の上で光りを放ち、山と河は帝都とともに壮大である」とを比べれば、どのようであらうか。言うまでもなく陳後主の方がまさっている。

岐海の逸民、張嬖、金陵にて記す

【注】

丹鉛…文字の添削、校訂に用いる丹砂と鉛粉。

唐・韓愈「秋懷詩」其七「不如觀文字、丹鉛事點勘」

明・胡應麟「丹鉛新録」楊子用修拮据典、摘抉隱微、白

首丹鉛、厥功偉矣」

紳緹…紳は、士大夫が腰に締めた礼装用の大帯。緹は、佩玉を帯

に結ぶひも。官職を有した士大夫をさす。

麗藻…華麗な詩文。

晋・陸機「文賦」「游文章之林府、嘉麗藻之彬彬」唐・

王勃「爲人與蜀城父老書」「麗藻華文、代爲雲泉之氣」

險麩…險麩に同じ。地名。名墨の産地として知られる。今の陝西

省千陽市。

『漢書』地理志上「右扶風、縣二十一、險麩」『宋書』

百官志上「天子所服五時衣以賜尚書令僕、而丞、郎、月

賜赤管大筆一雙、險麩墨一丸」

地界…地区、地方。

任昉「奏彈劉整」「其宗長及地界職司、初無糾舉」

點綴…飾りを加えて一層美しくする。

『詩品』中品「丘詩點綴映媚、似落花依草」晋・張浚

「白兔頌」其毛春素、纖毫秋黑。點綴五采、漸染粉墨」

〔芸文類聚〕獸部下兔引〕

贖貨…財物をむさぼる。

『文心雕龍』程器「班固詔寶以作威、馬融黨梁而贖貨」

鳳舸…彫飾をほどこした華美で大きな船。

『隋書』煬帝紀「庚申、遣黃門侍郎王弘、上儀同於士澄

往江南採木、造龍舟、鳳舸、黃龍、赤艦、樓船等數萬艘」

迷樓…煬帝が建てた壯麗で雅趣にあふれた宮殿。

唐・汪遵「汴河」「隋皇意欲泛龍舟、千里崑崙水別流。還

待春風錦帆暖、柳陰相送到迷樓」

帝閭…宮殿の門。

漢・揚雄「甘泉賦」「選巫咸兮叫帝閭、開天庭兮延羣神」

單于呼韓…前漢の匈奴の王。ここでは北方の隋軍をさす。

『漢書』匈奴伝「呼韓邪單于、遣其弟右谷蠡王等、西襲

屠耆單于屯兵、殺略萬餘人」

摩娑…手で撫でたりこすったりしてもむ。

後漢・劉熙『釈名』「摩娑、猶末殺也、手上下言之也」

謝…告げる。告知する。

『漢書』車千秋伝「謹謝丞相、二千石各就館」顔師古注

「謝、告也」

臧穀亡羊…『莊子』駢拇に見える話。臧と穀の二人の牧羊夫がい

て、臧は本を手に読書中に、穀は双六で遊んでいるうち

に、羊を取り逃がした。二人がしていたことは同じでは

ないが、羊を失ったということは同じ、ということ。

『莊子』駢拇「臧與穀、二人相與牧羊而俱亡其羊。問臧

奚事、則挾策讀書。問穀奚事、則博塞以遊。二人者、事

業不同、其於亡羊均也」宋・蘇軾「和劉道原詠史」「仲

尼憂世接輿狂、臧穀雖殊竟兩亡」

挾書…書物を私蔵すること。ここでは、詩文集を集めて私蔵する

ことをいう。

『爾雅』釈言「挾、藏也」『明史』文苑、周玄伝「嘗

挾書千卷止高家、讀十年、辭去、盡棄其書曰、在吾腹筭

矣」

能博…広く伝唱すること。ここでは、陳後主の「玉樹後庭花」等

が広く愛唱されたことをいう。

憑弔…遺蹟や遺物に対して往古の人物や史実に感慨をいだく。

明・徐枋「西山勝景図記」「多奇石、多古蹟、騷人憑弔、

資其風雅、山遊士女、諮爲故實」

好一個翰林學士…宋太祖・趙匡胤が宴席で李煜を評した語。翰林

學士は、天子の詔書及び文章起草する官。李煜は天子

というよりも良き文官だ、ということ。宋・葉夢得の『石

林燕語』に見える表現。

宋・葉夢得『石林燕語』「江南李煜、既降太祖、嘗因曲燕

問閨、卿在國內好作詩。因使舉其得意者一聯。煜沈吟久

之、誦其詠扇云、揖讓月在手、動搖風滿懷。上曰、滿懷

之風、卻有多少。他日復燕煜、顧近臣曰、好一個翰林學

士」

轉換月在手、動搖風滿懷…李煜が団扇を滿月に喩えて詠んだ詩。

滿月を通して宋太祖を称美。

日月光天德、山河壯帝居…陳後主が隋文帝の宴に侍して詠んだ「入

隋侍宴应詔詩」。

『南史』陳本紀下「登芒山、侍飲、賦詩曰、日月光天德、山川壯帝居、太平無以報、願上東封書」

【解説】

張變について

張變は字を紹和、号を海濱逸史といい漳州府龍溪（今福建省漳州市龍海市）の人。明の万曆二年（一五七四）に生まれ、崇禎十三年（一六四〇）、六十七歳をもって亡くなっている。『徐霞客遊記』で知られる徐宏祖とほぼ同時代の人である。父の廷榜（字は春宇）は鎮江府の同知を務め、その清廉さゆえ民衆の支持を得たが、上に仕えるのが不得意で降格の憂き目にあつた人物である。

父の愛を受けて育つた張變は、長じて群書を博覧し、万曆二十二年（一五九四）、二十一歳のとき挙人に合格する。そして時の才子、蔣孟育、高克正、林茂桂、王志遠、鄭懷魁、陳翼飛とともに「七才子」と称せられ、文名を高めた。その後天啓年間に何喬遠（『明史』卷二百四十二に伝あり）が『明実録』を編纂する構成員として張變を朝廷に推挙し、諸名士もこれへの参加を勧めたが、張變はこれを固辞して応じなかったため、世に「徵君」（朝廷から礼をもって招かれながら仕えない学識者）と称された。果たせるかな後に朝廷で党争があり、多くの官員が禍いに巻き込ま

れたが、固辞したことが幸いして張變は難を免れた。

張變は「志尚高雅、博学多通」との評を得る。この評は張變の没後、同じ漳州府漳浦の儒者黄道周が、崇禎帝に上疏した際に用いた表現で、黄道周は自分に七つの不如がある、品行高俊と卓絶倫表ということでは劉宗周に及ばない、志尚高雅、博学多通ということでは華亭の布衣陳繼儒と龍溪の挙人張變に及ばない、と述べている（『明史』卷二百五十五黄道周伝）。志尚高雅とは、張變が挙人に合格したのに官位栄達を求めなかったことをいい、博学多通とは、張變が経史諸子に通じて博文強識であつたことをいう。

張變の著作

張變は生涯に多くの著作を残した。その編著作には次のようなものがある。

- 東西洋考 十二卷 張變撰（『明史』芸文志、地理類）³
- 羣玉樓集 八十四卷 張變撰（『明史』芸文志、別集類）
- 霏雲居集 五十四卷 張變撰 明萬歷刊（『日本』国立国会図書館蔵）
- 霏雲居續集 六十六卷 張變撰 明萬歷刊（『中国』北京図書館蔵）
- 崇禎十一年刻本（河南省唐河県図書館蔵）⁴
- 閩中記 張變撰

（清・沈定均統修、清・吳聯薫增纂『漳州府志』卷之二十九人物二張變に、「有手定漢魏七十二家、

東西洋考、閩中記。羣玉、霏雲二集、行于世」とあり、福建師範大学歴史系《福建歴代名人伝略》編写組編『福建歴代名人伝略』一九八七年もこれを踏襲して「張燮：最著名的有《東西洋考》、其次有《霏雲閣集》、《羣玉楼集》好《閩中記》等」と記述。しかし、日本、中国、台湾の国家図書館に未見）⁽⁵⁾

七十二家集

張燮輯（「日本」国立公文書館内閣文庫蔵）

- 宋大夫集三卷 附録一卷 楚 宋玉 撰
- 賈長沙集三卷 附録一卷 漢 賈誼 撰
- 司馬文園集二卷 附録一卷 漢 司馬相如 撰
- 董膠西集二卷 附録一卷 漢 董仲舒 撰
- 東方大中集二卷 附録一卷 漢 東方朔 撰
- 王諫議集二卷 附録一卷 漢 王褒 撰
- 揚侍郎集五卷 附録一卷 漢 揚雄 撰
- 馮曲陽集二卷 附録一卷 漢 馮衍 撰
- 班蘭臺集四卷 附録一卷 漢 班固 撰
- 張河間集六卷 附録一卷 漢 張衡 撰
- 蔡中郎集十二卷 附録一卷 漢 蔡邕 撰
- 孔少府集二卷 附録一卷 漢 孔融 撰
- 諸葛丞相集二卷 附録一卷 蜀 諸葛亮 撰
- 魏武帝集五卷 附録一卷 魏 曹操 撰

- 魏文帝集十卷 附録一卷 魏 文皇帝 御撰
- 陳思王集十卷 附録一卷 魏 曹植 撰
- 王侍中集三卷 附録一卷 漢 王粲 撰
- 陳記室集二卷 附録一卷 漢 陳琳 撰
- 阮・兵集五卷 附録一卷 魏 阮籍 撰
- 嵇中散集六卷 附録一卷 魏 嵇康 撰
- 傅鸚鵡集六卷 附録一卷 晉 傅玄 撰
- 孫馮翊集二卷 附録一卷 晉 孫楚 撰
- 夏侯常侍集二卷 附録一卷 晉 夏侯湛 撰
- 潘黃門集六卷 附録一卷 晉 潘岳 撰
- 傅中丞集四卷 附録一卷 晉 傅咸 撰
- 潘太常集二卷 附録一卷 晉 潘尼 撰
- 陸平原集八卷 附録一卷 晉 陸機 撰
- 陸清河集八卷 附録一卷 晉 陸雲 撰
- 郭弘農集二卷 附録一卷 晉 郭璞 撰
- 孫廷尉集二卷 附録一卷 晉 孫綽 撰
- 陶彭澤集五卷 附録一卷 晉 陶潛 撰
- 謝康樂集八卷 附録一卷 劉宋 謝靈運 撰
- 顏光祿集五卷 附録一卷 劉宋 顏延之 撰
- 鮑參軍集六卷 附録一卷 劉宋 鮑照 撰
- 謝法曹集二卷 附録一卷 劉宋 謝惠連 撰
- 謝光祿集三卷 附録一卷 劉宋 謝莊 撰
- 謝宣城集六卷 附録一卷 南齊 謝朓 撰
- 王寧朔集四卷 附録一卷 南齊 王融 撰

梅 臘 彭 哉 卓 保 久

梁武帝御製集十二卷 附錄一卷 梁高祖武帝御撰
 梁昭明太子集五卷 附錄一卷 梁昭明太子蕭統撰
 梁簡文帝御製集十六卷 附錄一卷 梁太宗簡文皇帝御撰
 梁元帝御製集十卷 附錄一卷 梁世祖孝元皇帝御撰
 江醴陵集十四卷 附錄一卷 梁江淹撰
 沈隱侯集十六卷 附錄一卷 梁沈約撰
 陶隱居集四卷 附錄一卷 梁陶弘景撰
 任中丞集六卷 附錄一卷 梁任昉撰
 王左丞集三卷 附錄一卷 梁王僧孺撰
 陸太常集二卷 附錄一卷 梁陸倕撰
 劉戶曹集二卷 附錄一卷 梁劉峻撰
 王詹事集二卷 附錄一卷 梁王筠撰
 劉秘書集二卷 附錄一卷 梁劉孝綽撰
 劉豫章集二卷 附錄一卷 梁劉潛撰
 劉庶子集二卷 附錄一卷 梁劉孝威撰
 庾度支集四卷 附錄一卷 梁庾肩吾撰
 何記室集三卷 附錄一卷 梁何遜撰
 吳朝請集三卷 附錄一卷 梁吳均撰
 陳後主集三卷 附錄一卷 陳後主御撰
 徐僕射集十卷 附錄一卷 陳徐陵撰
 沈侍中集三卷 附錄一卷 陳沈炯撰
 江令君集五卷 附錄一卷 陳江總撰
 張散騎集二卷 附錄一卷 陳張正見撰
 高令公集二卷 附錄一卷 後魏高允撰

温侍讀集二卷 附錄一卷 後魏温子昇撰
 邢特進集二卷 附錄一卷 北齊邢邵撰
 魏特進集三卷 附錄一卷 北齊魏收撰
 庾開府集十六卷 附錄一卷 北周庾信撰
 王司空集三卷 附錄一卷 北周王褒撰
 隋煬帝集八卷 附錄一卷 隋煬帝御撰
 盧武陽集三卷 附錄一卷 隋盧思道撰
 李懷州集二卷 附錄一卷 隋李德林撰
 牛奇章集三卷 附錄一卷 隋牛弘撰
 薛司隸集二卷 附錄一卷 隋薛道衡撰

初唐四子集 四十四卷 張燮輯 明崇禎刊〔日本〕宮内庁書陵部藏

王勃集 十六卷

楊炯集 十三卷

盧照鄰集 七卷

駱賓王集 八卷

初唐四子集 四十八卷 張燮輯 明崇禎十三年刊〔中國〕北京函

書館藏

楊盈川集 十三卷 附錄一卷

幽憂子集 七卷 附錄一卷

駱丞集 八卷 附錄一卷

王子安集 十六卷 附錄一卷

『七十二家集』について

漢魏六朝の詩文の総集としては明・張溥の『漢魏六朝一百三家集』が一般的だが、これは張燮の『七十二家集』を基にして編纂したもので、陳捷の論文「唐以前文章の総集」(『文史知識』一九八三年第八期、中華書局刊)には

明代において梅鼎祚が『歷代文紀』を編輯し、張燮がこれを継承して『七十二家集』を編輯し、張溥がさらにまた二編を基にして『漢魏六朝百三名家集』を編輯した。

と記し、魯迅も『嵇康集』十巻の序で、『嵇康集』を編輯校訂する際に、張燮の『七十二家集』所収の『嵇中散集』六巻を比較校勘の対象としたことを記している。

『七十二家集』は明刊本が内閣文庫に所蔵されているほか(京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センターの「全國漢籍データベース」による)、『續修四庫全書』(上海古籍出版社一九九五年刊)に影印本が収められている。この影印本には一部不鮮明な所があるため(下図)、このたびの翻字では『歷代卅四家文集』賞雨軒藏板(中州古籍出版社一九九七年刊)によった。

この『歷代卅四家文集』はどういう板本かという点、その序に「明代張燮所編『歷代卅四家文集』的發見與評價」と題した出版説明があり、そこには、この板本は一九八九年に河南省唐河県図

書館で偶然に発見された「海内外之獨集孤本」で、最上質の宣紙を用い、字体が清晰で、「精校精刊之善本」と称するに足る板本であると記している。

陳後主集題辭
 陳後主才士也彼欲使於黛臺
 為丹鉛紳綈都成麗藻宮中
 府中化作淪靡地界而問出
 酒點綴之非為他亡國之主
 貨淫刑使汽不堪命也即以隋
 陳後主集乃
 場帝論場帝文情自起然屬
 柯迷樓禍沿沃出而陳僅高洪
 于帝閣單于呼韓威彈絕塞而
 陳僅摩娑于筆陣摧輪等耳
 碩就中相主可數層余悲場
 帝之戮張麗華以謝吳民而到

頭抑又甚也嗟乎臧穀已羊均之
 悼表頽換書之與能博終是不
 伴懷古者那得不憑而吊之乎
 厥後李煜之在江南一稱得主
 風流罪過而後主正復相嘗
 李煜降宋太祖目送之曰好一
 陳後主集序
 個翰林學士余於陳後主上云
 然轉換月在手動搖風滿懷視
 日月光天德山河壯帝居又何
 乎設當以陳後主為滕
 岐海逸民張燮識于金陵

『七十二家集』

〔續修四庫全書〕收、上海古籍出版社一九九五年

【共著者紹介】

彭臘梅

経歴：一九八六年陝西師範大学中文系卒業 一九九五年

陝西師範大学大学院中国古典文学研究科修了文学

碩士 一九九五年暨南大学華文学院講師 二〇〇

三年福岡日中文化センター講師 二〇〇六年九州

大学大学院人文科学府中国文学専修進学

専門：中国古典文学

注

(1) これまで張燮の『七十二家集』が顧みられなかったのは、『嵇康集』を輯校した魯迅がその序で記した『七十二家集』への評が影響していると考えられる。魯迅は次のように言う。

在張溥漢魏六朝百三名家集中者、合為一卷、張燮所刻者又改為六卷、蓋皆從黃本出、而略正其誤、并增逸文。張燮本更變亂次第、弥失其旧。(魯迅輯校『嵇康集』序)

(2) 影印の原本として印刷の鮮明な『歷代卅四家文集』賞雨軒藏板(中州古籍出版社一九九七年)を用いた。

(3) 『東西洋考』について張燮の著作のうち最も世に知られるものは『東西洋考』十二卷であろう。万曆四十五年(一六一七)、張燮四十四歳の作である。この書の篇名

に「西洋列国考」「東洋列国考」「外紀考」「税餉考」「税璫考」「舟師考」「藝文考」「逸事考」があり、今のベトナム、タイ、インドネシア、カンボジア、マレーシア、フィリピン及びその周辺国の沿革と物産と貿易の状況を記している。「外紀考」では当時通商関係がなかった日本とオランダのことを記し、「税餉考」では明代の税収を、「税璫考」では高官の職権濫用を、「舟師考」では造船と海運、気象状況を、「藝文考」では宋、元、明と列国との相互文献を、「逸事考」では秦漢以来の史籍に見える対列国文献を記している。この書が外国に対する認識を拡大させた功績は大きい。またこの書がいかに世に受け入れられたかは、清・邵懿辰『増訂四庫簡明目錄標注』の邵章の「統録」に、「明萬曆戊午刊本、鈔本」とあることから伺える。万曆戊午は万曆四十六年（一六一八）で、『東西洋考』が完成した万曆四十五年の翌年には、早くも刊本と鈔本が世に流布していたことが記されているからである。

- (4) 『歷代卅四家文集』の「歷代卅四家文集・序」に記載する「明代張燮所編『歷代卅四家文集』的發見與評價」に、這次在唐河縣圖書館古籍中、又發現他遺著也『霏雲居集』五十四卷、『續集』六十六卷、共五冊。爲崇禎十一年刻本。

とある。

- (5) 清・邵懿辰『増訂四庫簡明目錄標注』に、「閩中十子詩

三十卷 明袁表、張燮同編。明萬歷中刊本」とある。これによれば張燮には『閩中十子詩』三十卷の編著があったことになるが、文淵閣本『欽定四庫全書』収『閩中十子詩』三十卷は、明袁表、馬燮編で、張燮の名はない。

久保卓哉·彭臘梅

The Transcription, Translation and Notes to the *Chen Hou Zhu Ji*'s Inscription of *Qi Shi Er Jia Ji*, Writing of 72 Authors, compiled by *Zhang Xie* in Ming Period

Takuya KUBO La Mei PENG

The inscription, written by *Zhang Xie* who is the compiler of *Qi Shi Er Jia Ji*, is a literary document that cannot be missed. We transcribed and gave a translation and notes to the inscription of *Chen Hou Zhu Ji* and in addition commentated on *Zhang Xie* and *Qi Shi Er Jia Ji*.

Keywords: *Zhang Xie* 張燮, *Zhang Fu* 張溥, *Qi Shi Er Jia Ji* 七十二家集, *Li Dai San Shi Jia Ji* 歷代卅四家集, *Han Wei Liu Chao Bai San Jia Ji* 漢魏六朝百三家集, *Chen Hou Zhu* 陳後主